
三光小話
さんぽ

三光　小話さんぽ

前書き

おや、こちらを手に取ってくださいましたか。

さぁさぁ、どうぞこしかけて、ゆったり読んでくださいまし。

本日お手に取っていただいたこの本は、この三光に伝わる物語をば、いくらか取りそろえてございます。

ああ、読んでみようと思ったからには、きっと「三光とはどこだ」などはとうにご存じでございましょう。とはいえ、まぁ一つお聞きなすって。

三光といいますのは、平成の大合併にて、大分県中津市の一部になりました、三光でございます。それ以前は大分県下毛郡三光村でした。真坂村、山口村、深耳村の3村が合併した地域でして、今でもその名残がそこかしこにございます。

ずいぶん古く、日本の歴史が刻まれるようになるよりも前から、ずっと

誰かが暮らしていたことが分かっておりますもんで、代々伝わってきた物語もたくさんあれば、新たに出来上がってきた物語もございます。

ああ、この本のお話は、何も作り話じゃぁございませんよ。三光観光ボランティアガイドの会の皆さんが、昔話や場所を調べて記録してきたものであります。皆さんはそれで紙芝居を作られておりますよ。せっかくなんで、もっと手軽な読み物もあっていいんでなかろうか、とこの本になっておるわけでございます。全部を載せておるわけではありませんから、もすこし他のも読みたいとなれば、どうぞおたずねされてはいかがかな。

書き手の私としましては、読者のあなた様がさてはてどのようなお方なのか、ちぃっとばかし気になるのでございます。とはいえ、どのような方であろうと、きっと三光のことが気になる方でございましょう。ならばこそ、この地域のお話をぜひぜひお見知りおきください。「こんな物語のある場所かぁ」という目は、きっと別の見え方をもたらしてくれることで

しょう。

よもや、すでにご存じのお話もあるやもしれません。話のオチが、聞いていたものと違うこともあるでしょう。それをご存じならば、きっと面白いです。オチが変わるというのは昔話によくあることなのですが、大勢の人に長い間くり返し語り継がれてきた、あかしではないでしょうか。

それでは、ご案内はこの辺にいたしましょう。ここからはお話の世界です。どうぞお好きなところから、お好きなだけお進みください。

書き手　三光地域おこし協力隊　松木　永

もくじ

1. 箭山んサルとウサギとカエル……1
2. 箭山太郎と箭山の河童……6
3. 和気清麻呂と箭山のイノシシ……11
4. 深水谷……17
5. 荒瀬井堰……22
小話「水の道と人の道」……28

6．ややまのふしぎな池……29
小話・ややまの大イカ……34
7．耶馬渓鉄道……35
8．八面山平和公園……40
後書き……45

1. 箭山(ややま)んサルとウサギとカエル

むかしーむかしの　こっちゃら
箭山(ややま)に　いじんわりいサルと
ええらしいウサギと
大けねえカエルが
おったちこ

ある時　箭山(ややま)のてっぺんで　三びきが
「こびりんもち　つくっち、くおうじゃねぇか」
と　そうだん　したとこ

そりじ　三びきで　わけあって
もちをつく　じゅんびを　したとこ



足んはやい　ウサギは　もち米とあずきを
もってきたんじゃら
走るんがでけんカエルは　大池の水を
はらいっぺえ　ぬうじきたちこ
サルは　まきを　山んごつとっち
きねと　うすを　つくったとこ。

それじ　三びきはなぁ　さっそく　もちをついち
どげち大きい　もちを三つ　作ったんじゃ
ほったらあんた　いじんわりいサルは
こんもちを　一人じめ　しとうなっち　こういった
「こんもちを　うすん中(なか)入れち　山ん上からころがそうや
一ばんはよう　山んすそじ　とったもんが　くうこつにしようや」



足んはええウサギは　こたえた
「そりゃいい　かんがえじゃのう、そげしゆや」
走るこつがおしいカエルは　なやんじなあ
「そげんこつせんじ、一つずつ　わけちから
　いいのう」
でんが、カエルは　サルに
とうとう言いまかされちしもうた。

そりじのう　サルが　もち入れたうすを
がけんてっぺんから　転がした。
ウサギは　風んごつ　すっとんじ
いっちしもうたちこ、
サルは　うすん上に　とびのっち
くだっちいっち　しもうた。



ほったら　そりがのう
とちゅうん　木のかぶに　ひっかかっち
うすが　ピューンち
たあこう　とび上がっちしもうた
そんひょうしに　サルは
しりもちをついちのう
しりかぶを　赤こうすりむいち
こしをぬかしち　しもうたんじゃら
そりじゃが　今でん　サルんしりが
赤けえしちよるのんは　そんためじゃぁ。

足んはええウサギは　山んすそじ　まっちよった。
しっかし、ころがっち来た　うすを　うけそこねち
前ん足を　おっちしもうたんじゃぁ。





そりじ　ウサギん前ん足は
みじけえじゃろうがや。

何んしてん　おそいカエルは
ゆっくり　ゆっくり　山をくだっちいった
そして　山んすそに　ころがちよった
うすん中んもちを　くうちしもうたとこ
そりじ　カエルん腹は　大きいんじゃら
これが三光の昔話じゃら　わかったかぇ



2. 箭山太郎と箭山の河童

大昔のこと、箭山に、山を守るおじいさんとおばあさん、そして息子の太郎が住んでいました。老夫婦は、太郎におよめさんをもらって、山を守り続けてほしいと思っていました。

ある日、太郎は狩りに出かけましたが、その日は何も取れず、歩き回っていました。そのうちに、佐知の河原まで来ていたのです。



すると、川で水浴びをしている、一人の娘さんを見つけました。その娘さんはみんなから「佐知姫」と呼ばれている人で、太郎はすっかり彼女に一目ぼれをしたのです。気の早い太郎は姫を追いかけますが、姫は佐知の集落に逃げ帰りました。



逃げられましたが、太郎の頭は姫でいっぱいです。夜になるのを待って、また姫を探しに行き、家を探し出して連れ去ってしまいました。

驚いたのは、姫の両親です。娘を奪われ、悲しみにくれ、一年の月日が経っていました。

悲しみのあまり、二人は川に身を投げようと、「魔の草」と呼ばれる深い淵のところにやってきました。真っ青な水がうず巻いた、底の見えない不気味な淵です。二人は最後に、娘がいるはずの八面山を見上げて、彼女の幸せを祈ります。

そうしていると、なんと魔の草からぬうっと現れる影があります。それは河童でした。どうやら河童は、突然現れた二人の様子をふしぎに思ったようなのです。「どうしたんですか」と聞くので、二人は一人娘が箭山太郎にさらわれたのだと話しました。

話を聞いた河童は、なんと自分が姫を取り返しに行くといいます。二人は助けてくれるならなんだってよい、という思いですから、河童の提案に飛びつきました。

準備を整えた翌朝、河童は老夫婦から弁当をもらって出発します。10日以内に姫とともに戻ってくる約束です。

河童は、休むたびに頭の皿に水をさし、歩き続けました。丘をこえ、川を上り、山の上を目指します。



夕暮れ近くになって、ついに山の上にたどり着きます。そこには、なんと大きな池がありました。この池は、水浴びが好きな佐知姫のために、箭山太郎が掘った池だというのです。

河童は考えます。「この池で待っていたら、水浴びに来る姫に会えるはずだ。」

河童は待ち続けましたが、三日たっても四日経っても姫は現れません。池から上がって近くを探しても、住まいさえ見つかりませんでした。

姫の両親との、約束の日が近づいてきます。明日までには見つけなければなりません。

そんな時に、松林の中から楽し気な声が聞こえてきました。河童が水の中から目をこらしていると、池のほとりに人影が現れました。

やってきたのは、ひげだらけの大男と、子供を背負った女の人でした。幸せそうな親子です。

彼らこそが箭山太郎と佐知姫でした。



河童は佐知姫を見つけることはできましたが、一晩中悩むことになりました。

約束を守るべきか、親子を守るべきか。

何度も考え、約束を破る心苦しさを抱えながらも、親子を守ることを選びました。箭山の池に残り、池守として暮らしたのです。

河童に守られた池は、いつも豊かできれいに保たれ、その水を使う人たちは豊作に恵まれました。

また、知らぬ間に河童に守られていた太郎と姫は、その後力を合わせて山を守り、仲よく暮らしたということです。



3. 和気清麻呂と箭山のイノシシ

日本各地に、「和気清麻呂伝説」が残っていますが、ここ三光にも伝説があります。

和気清麻呂は、奈良時代から平安時代にかけて活躍した、朝廷のお役人です。この人は、平安時代の始まり、７９４年の平安京完成の時に、有名になりました。

ただ、清麻呂伝説というのはそれより前の大事件、道鏡事件から始まっています。

平安時代の前の奈良時代ですから、今から１２００年以上前になります。

当時の京には弓削道鏡という僧侶がいました。道鏡は当時の称徳天皇の信頼を獲得し、権力の頂点を極めていました。ついには、自分自身が天皇



になりたい、とまで考えるようになったのです。道鏡はそのために、宇佐八幡神からお告げをもらったと言い出しました。

天皇の代替わりとなれば大事ですから、称徳天皇はある役人に、宇佐八幡神がいる宇佐神宮まで確かめに行くように命じました。その役人というのが、正直者の若き和気清麻呂です。

清麻呂は、京からはるばる宇佐八幡宮まで参上し、八幡神に一心に祈って、本当のお告げを待ちました。そうして告げられたのは、こんなお告げでした。

「天皇家の血筋以外の者を天皇にするべからず。皇族にあらずして、皇位をのぞむやからは、速やかにのぞくべし」

清麻呂はすぐに京に戻り、宇佐八幡のお告げをそのまま伝えました。道



鏡が天皇になる計画を破ったのです。

そうなれば、邪魔をされた道鏡はカンカンに怒ります。権力を利用して、清麻呂を罪人にしてしまいました。清麻呂は足の筋を切られ、流刑として大隅（おおすみ）の国（今の鹿児島県）に送られることになります。

当時の移動手段といえば、船か馬か徒歩といったところでしょう。清麻呂は地道に大隅（おおすみ）の国へ向かっていました。

その途中で、ちょうどこのあたりも通り掛かることになります。清麻呂は縁のできた宇佐八幡にもう一度参ろうとしていました。しかし、これまでの長旅のために切られた足が痛んで、豊前国の加来村黒水（かくむらくろうず）の辺りで、とうとう動けなくなりまし



た。

その様子を見たひとりのおばあさんが、家でとれた黒豆をいって、食べさせてやりました。通りすがりの旅人に、栄養のあるものを分けてくれたのです。

清麻呂はこれに大変喜び、おばあさんの下で疲れをいやしていました。

そのとき、道鏡が仕掛けた追手が近づいている、という知らせがやってきます。清麻呂は足が動きませんから困っていますと、箭山のほうから三百頭もの猪がやってくるではありませんか。

猪たちは、清麻呂を背負うと、いきおいよく山や谷を越えていきます。岩壁にぶつかれば川を渡り、坂が急ならゆすり上げて登っていきます。これらは、





そのまま地名になって「一の渡り」や「二の渡り」、とうげを越えた場所は「猪越（いごえ）」、「ゆすり坂」に、一休みで稲を食べた「稲用（いなもち）」などがあります。今でも残っている地名です。

そうやって、和気清麻呂は猪たちに助けられて、無事に宇佐神宮に到着することができました。

清麻呂はこの助けと幸運は神さまが用意してくれたのだ、と感謝しました。すると神殿から現れた五色（ごしき）の小蛇が、清麻呂の足の傷をなめ、すっかり良くなります。清麻呂は、これらすべて神のおかげだ、とまた大変喜んだそうです。

無事送り届けた猪たちは、もといた場所、つまり箭山のふもとに帰っていきました。その場所に、社（やしろ）を立てて記念したのが、「猪山八幡宮（ちょさんはちまんぐう）」と言われています。

さて、その後清麻呂はなんだかんだと大隅の国にたどり着いたといいます。そして、道鏡が朝廷からいなくなった後、その正直さを評価されて、再び京で役人として活躍したのだそうです。

その、京に戻る途中に、再び三光を訪れたらしいのです。あの黒豆をくれたおばあさんのことを忘れずに、「黒豆御前」の名前をおくったり、ごうかな絹の片袖を渡していたりしたのだそうです。猪たちを祀った猪山八幡宮にも、もう片袖を渡したのだそうです。この絹の片袖は、それぞれの場所で大切に保管されているのだといいます。



4. 深水谷（ふこうずだに）

お次は、深水小学校や秣小学校がある、深水谷のお話といたしましょう。

まずは一番古―いお話です。

時代は、和気清麻呂よりももっと前のことです。いま秣（まくさ）小学校のあるあたりに、「塔（とう）の熊（くま）」というお寺があったそうです。とっくになくなっているので、「塔の熊廃寺（くまはいじ）」の名前が残っています。屋根かわらが独特だったそうで、布の折り目のような模様があったのだとか。

すごいのはこれがお寺であったことです。といいますのも、当時はまだ仏教というのが新しいもので、京の最先端でもお寺というものがとても珍



しかったのです。

当時の人にとってのお坊さんというのは、ふしぎな言葉や術を知っている、超能力者に見えていたかもしれません。秣小学校のところに、そんな超能力者が住んでいたのでしょう。



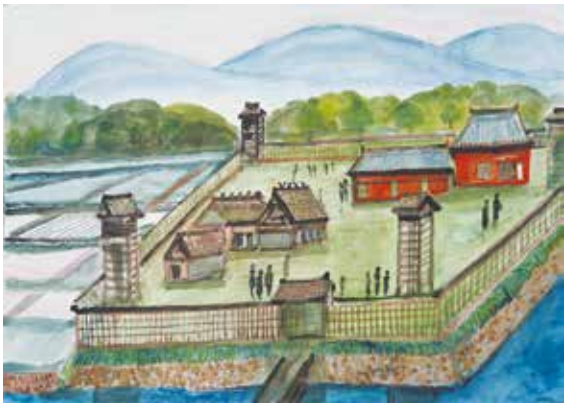
その後、荘園時代とも呼ばれる平安時代のころ、深水の谷は宇佐神宮の荘園でした。下深水から上秣のあたりが、その時の田んぼだったんじゃないかと思われます。

深水の谷は宇佐宮御炊殿番長、（現代風に言うなら、宇佐神宮大料理長）が直接管理していて、神事でそなえる野菜や果物を育てていたそうです。特別な場所ですから、「翁丸の御園」という名前が付けられていたんですって。

平安時代から鎌倉時代に入ると、刀やヨロイを身にまとう武士の時代になります。

この深水谷にいたのは、その名も深水氏という武士の一族で、谷中に城を作っていたようです。一番大きいお城は「ズリヤネ城」といって、今は民間の工場がたっています。ほかにもたくさんあって、意外と身近なところに、城跡の土山や堀があるのかもしれません。

この中世武士の深水氏と同じ名前が江戸時代の庄屋（しょうや）として残っています。江戸時代の記録に、大庄屋深水惣右衛門（おおしょうやふこうずそうえもん）という名前があるのです。庄屋というのは各地区の村長のような、信頼と責任のある立場の家です。





記録というは、一揆（いっき）の記録です。当時の深水谷は、中津領ではなく時枝領になっていました。その時は、年貢の取り立てがひどくて、時枝領西組の大庄屋・深水惣右衛門（そうえもん）が、東組の大庄屋と一緒に、やり直してほしいと言いに行ったのです。しかし、あえなく追い返されて、大勢の農民による一揆になったのです。

この時枝領だったころの名残なのか、深水と秣の郵便物は、いまでも宇佐の郵便局に集まっていますね。

宇佐神宮や時枝領などからもわかるように、深水谷は宇佐側との交流が盛んでした。ですから、この地域の人たちはいつも山を越えて行き来していたそうです。いろいろなところに、歩いたり、馬を引いたりするとうげ道が作られていました。

明治のころには久保から赤尾につながる「キリズシ隧道（トンネル）」もつくられて、

お酒や薪を運んだり、学校の通学路にしたりして、たくさんの人が歩いていたそうです。

車が通れないので、今はめったに使いませんが、キリズシ隧道は今でも残っていますよ。宇佐側に記念碑もあります。

深水の谷は、普通のいなかに見えるかもしれませんが、はるか昔から誰かが暮らし、つないできた場所です。深水谷の歴史の中から、日本の歴史の変動のほとんどを知ることができますよ。



5. 荒瀬井堰（あらせいぜき）

むかしむかしのこと。とは言っても、とびきり古いわけではありません。中津城にお殿様がいる、江戸時代と呼ばれる頃のことです。

三光から中津のほうに向かっては、昔からたくさんの田んぼがありました。しかし、実はこの辺りは台地になっていて、川より少し高いのです。高い、ということは川の水を直接田んぼに引けないということです。

この地形の不思議（ふしぎ）は、耶馬渓溶岩とか、山国川の河口の場所などのお話が関係しているのですが、ここではやめておきましょう。重要なのは、田んぼの水がない、ということです。

人々は小さな谷にたくさん池を作って、雨水をためて何とかしていました。生きていくのはでき



たようですが、江戸時代はなるだけたくさんの米を作れることが大切な時代でした。

米をたくさん作るには、田んぼを広げればよいはずですが、そのための水が足りません。日照りになると、広い田んぼはすぐにからからになってしまいます。

下のほうを見ると、山国川の豊かな水が流れています。誰もが、あの水で田んぼをしたいと思っていました。

最初にどうにかしようと考えたのは、寛永（かんえい）年間（1625年）の藩主（はんしゅ）・細川忠興（ほそかわただおき）でした。彼は計画を立てましたが、工事費用が用意できなくて、なかなか始められませんでした。

そうこうしているうちに、中津のお殿様は小笠（おがさ）



原さまになりました。農民代表の大庄屋今津作右衛門や、お侍の片桐九太夫、大工棟梁の内海作兵衛らが、熱心にお殿様に水路の計画をお願いします。そして3代目の小笠原長胤の時、ようやく実行が決定しました。貞享2年（1685年）のことです。

お侍の片桐九太夫は山国で金山の仕事をしていましたから、川沿いの道を知りつくしています。大工頭の内海作兵衛は設計図を書きました。大庄屋の今津作右衛門は、他にも水を得られる地域の人に声をかけて、働く人を集めました。念願の水路をつくると聞いて、たくさんの農民たちが工事に加わりました

川には堤をつくり、水門を立て、村から村へとつながる長い水の道を掘っていきます。この時水門を作ったのが、本耶馬渓にある荒瀬、という場所でしたから、この水路を荒瀬井堰と呼ぶようになります。

この工事の難しいところは、とにかく長いこと、ほとんど平らなところに水を流すこと、それから岩を掘りぬくことでした。

長いことは、たくさんの人の協力でなんとかなりました。みんなずっと水が欲しかったのですから、協力者はたくさんいたのです。

平らなことは、どうにかこうにか高さを調べることで何とかしました。どこが高く、どこが低いかを知ることができれば、ちゃんと水が流れるように計画することができました。



最後の岩を掘りぬくことは、どうしても難しい工事でした。川の水門から、村の近くにつなげる大事な部分ですが、どうしても山すその狭いところに水路を作る必要がありました。その山すその地質が困りものだったのです。さっきまで硬い岩を掘っていたのに、次の場所は柔らかい土になっ

ていて、せっかくのトンネルが潰れてしまいます。事故が多くてたくさんの死者やけが人も出ました。

片桐九太夫（かたぎりきゅうだゆう）は、「これはふつうのお百姓では無理だ。岩山堀りの専門家を呼ぼう」と考えました。そして山国の草本金山（くさもときんざん）から、専門家二百人を呼んで来たのです。



この工事のころに「堀くず一升（いっしょう）、銭一升（ぜにいっしょう）」と言われていたそうです。掘った土と同じ量のお金がもらえるということですが、こうでもしないと出来ないくらい、危険な仕事だったようです。

予定よりずっと、お金も人手もかかった、大変な工事でした。

とはいえ、成果は実ります。工事開始から2年たった、元禄2年（1687年）に、やっと水門が開かれ

るときがきました。

山国川の水がとうとうと台地へ流れこむと、農民たちは大声をあげ、涙を流して喜んだといいます。もう、夏の間日照りの心配をすることも、来年の水の心配をすることもなくなったのです。

真坂、山口、大幡、鶴居、三保、如水、そして今津まで、山国川の水が届くようになりました。長さ60㎞、面積1136ヘクタールをうるおしています。

この「荒瀬井堰」は、江戸時代のはじめに行われた、村の運命を変えるような大工事でした。そして、約三百年たった今も田んぼや畑をうるおしつづけています。

むかしの人たちの切実な努力が、今も私たちの暮らしを支えているのです。



小話「水の道と人の道」

むかし、下毛の台地に水をはこぶために作られた荒瀬井堰。その水路の中でも、鉱夫が掘り抜いたトンネルを川平間歩と呼びます。間歩というのは人が立って歩ける程度のトンネルのことで、川平という地域にあります。

そして、本耶馬渓には同じく素掘りの有名なトンネルがあります。禅海和尚が掘った青の洞門です。青の洞門の工事開始は、川平間歩ができてからおよそ四十年後のことでした。禅海和尚は、地質的によく似た荒瀬井堰の工事のことをよく調べてから、同じ方法でトンネルを掘っていったのだそうです。

こうして、村をうるおす水の道・川平間歩と、人を守る人の道・青の洞門が生まれました。どちらもたくさんの人の知恵と力がこめられ、今も大切に語りつがれています。

6. ややまのふしぎな池

三光の奥にそびえる八面山。ややまと呼ばれることもあります。その上には、2つの池があります。大きい池のほうが古く、小さい池のほうが新しいです。今回は、大きいほうの「大池」にまつわるお話をいたしましょう。

まずは有名な龍のお話です。

時は江戸時代。荒瀬井堰が完成した100年後くらいの1785年のことです。その年は、雨がふらなくて、荒瀬井堰があっても、ひどい日照りになってしまいました。誰もがいろいろな方法で、雨ごいをしますが、雨は降りません。

ついに、中津の自性寺というお寺から、海門和尚（かいもんおしょう）というお坊さんがやってきました。海門和尚は、河童に



おわび状を書かせたり、神通力を使ったりする本当にすごいお坊さんなのです。この和尚が、雨ごいのために大池までやってきました。

和尚は六人の弟子たちといっしょに、古池のほとりで七日七夜、お経を唱えお祈りをつづけましたが、空には雲一つなく、皆あきらめかけました。

その時、一陣の風が吹き、水面が泡だって、山が霧に包まれました。霧の中から、一つの影が和尚の前に現れたのです。影は、人間の顔に竜の体、そして不思議な珠(たま)をもった女竜でした。



竜は和尚に言います。

「雲はありません。お祈りを続けても無駄です。しかし、和尚。あなたが私を成仏(じょうぶつ)させてくれると約束するなら、この珠を授けて、私の命で雨を降らせてあげましょう。」

和尚は竜に答えます。

「珠をいただきましょう。必ず成仏させると約束します。雨を降らせてください。」

竜は珠を和尚に渡すと、空へ登っていきました。まもなく、空はまっくらになり、ゴロゴロと雷が鳴り、ざあざあと大雨がふってきました。竜の雨は五日もつづき、田んぼも川もよみがえり、村人たちは大よろこびしました。

お寺に戻った海門和尚は、約束どおり女竜の成仏の法要を行い、女竜の珠は「龍珠（りゅうじゅ）」とよばれ、いまもお寺に大切にのこされています。

ちなみにですが、この龍珠、始めは中津のお殿様のところに保管されていたそうです。柔らかくて白い珠で、雨を降らせる力があったのだといいます。どうしてか女の人に見られてはいけない、というルールがありました。

隠されてしまってはついつい見たくなるもの。ある日、お城の姫様がこっそり覗き見てしまいました。すると、パチンとひびが入って、硬くて黒い珠になったのです。

この変わってしまった珠には、もう不思議な力はありませんが、お寺に今でも残っているのですよ。

さて、もう一つ、大池のお話をいたしましょう。今のおじいちゃんのお父さんくらいの人が、実際にであったことのあるお話です。

時は昭和6年（1931年）の梅雨のころ。今度は雨が降り続いていました。毎日毎日雨だらけ、という7月21日の朝のことです。

金色の谷にごう音が響き渡り、茶色のだく流が集落をおそいました。大池の堤防（ていぼう）が決壊したのです。田んぼも家も一瞬で流されました。人も馬も牛も流され、一面石ころの河原になったのだそうです。

このだく流があまりの勢いで川を下って行ったの



で、それまでマムシがいなかった今津のほうに、マムシが流れ着いた、なんて話があるそうです。

大池は、大切な農業の水です。田口の人々は、大池の堤防をつくりなおしました。まだ、八面山の道路ができるよりも前のことです。工事中にも若者が亡くなる事故があったり、機械無しで重いローラーを回したりしたのだそうです。



今の大池の立派な堤防は、その時に出来上がった堤防です。渡り切った先には、工事の大変さを刻んだ石碑が残っています。また、堤防の脇に、当時使ったコンクリのローラーもありますよ。

ややまの大池には、女竜のお話や、大水のお話がつたえられています。むかしから今日まで、かなしいことも、うれしいことも受け止めた、大切な池なのです。

小話・ややまの大イカ

大池のお話には、こんなものもあるそうです。

むかし、ややまの大池のほとりに、小さな尼寺（あまでら）があり、一人の尼（あま）さんが住んでいました。ある日、仕事で里に下りた時に大きなイカを買って帰りました。

出家の身ですが、久々のごちそうには心おどるもの。さっそく台所でイカを料理しようとしたとき、イカはぴょんととびはねて、あっというまに大池へ消えてしまいました。

尼さんはびっくりして、そして殺生をしようとしたことを反省し、さらに仏門の修行に入り込んでいったといいます。

一方で、大池に逃げこんだ大イカは、やがて池の主になりました。村に異変が迫ると、黒い墨をぷうっとはき、人々に知らせたのだそうです。

7. 耶馬渓鉄道

中津駅から山国の方まで、昔鉄道があったというのは、聞いたことがあるでしょうか。耶馬渓鉄道とか、耶鉄（やてつ）と呼ばれていたそうです。

耶馬溪といいますのは、切り立った岩と山国川の並んだ、景色のよい場所として有名なところでございます。三光から見ますと、八面山の向こう側の、山々が連なっておる方向が本耶馬渓、耶馬溪になりますね。

この耶馬溪に鉄道を走らせようと、人々が声を上げたのは明治20年代だといいます。今のおじいちゃんのおじいちゃんくらいの人たちです。まだ日豊線も作りかけで、中津駅も作る前から、「中津から日田までつながる鉄道があったら、便利になる」と言っていたといいます。

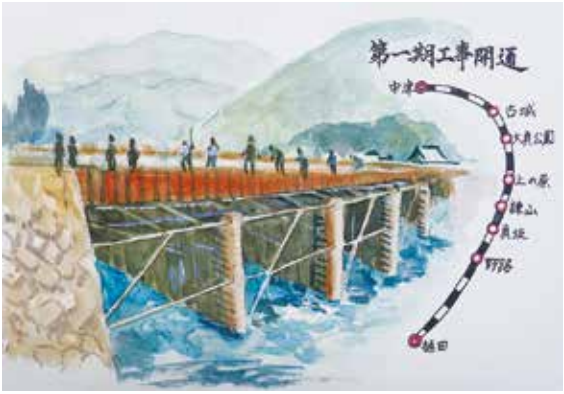
しかし、鉄道というのは大工事ですから、ちゃんと計画を立てて、お金



も用意して、許可を取らないといけません。20年もかかった明治44年に、ようやく中津から柿坂を結ぶ鉄道計画の許可が出ました。

許可されたのは軽便鉄道と言って、普通より狭い線路の蒸気機関の鉄道でした。さぁ、鉄道会社を作って、工事を始めていきましょう。耶馬渓鉄道株式会社の誕生です。

鉄道工事といいますのは、線路工事が一番大変です。どのルートを通れば簡単で安くなるのかを計画しますが、近所の住民に理解してもらわないといけません。はじめは、山国川の川沿いに線路を作ろうとしました。が、川沿いはちょうど田園地帯。米や野菜を作っていますし、牛や馬もたくさんいます。黒い煙と大きな汽笛を鳴らす蒸気機関車が通ると、野菜は黒くなるし、牛や馬が驚いて暴れてしまう、と大反対されました。ですから、線路は古城の



坂を上り、下毛原台地の上の原や諫山、真坂を通ることになりました。

初めての列車は大正2年の12月に走ったのだそうです。途中である樋田（ひだ）駅までが開通し、最初の列車とともに開通式が行われました。当時の写真が残っていて、皆が着物でズラリと並んでいますよ。



線路は、その後順調に伸びていって、最初の計画よりも長く山国の守実まで繋がりました。線路の幅を普通の幅にする大工事もすることができました。人も貨物も運んで、耶馬溪の谷間を蒸気機関車が駆け抜けていたのです。

そうそう、戦時中も耶馬渓鉄道は走っていたのですが、その時はいい燃料が手に入らなかったので、木炭や竹炭で走っていたのだそうです。それだと力が足りなくて、特に古城の坂を上るのが大変だったとか。時には登り切れずに、一度下がってから登ったり、乗客が線路脇に下りたりすることもあったそうです。その隙に、無賃乗車

しようとする人もいましたから、車掌は大変だったのだとか。

耶馬渓線が出来上がっていった大正時代は、名勝耶馬渓が有名になっていった時代でもあります。新緑や紅葉を目当てに、多くの観光客が訪れるようになりました。沿線に温泉開発もして、観光地として発展していきます。

車内ではウグイス嬢（じょう）と呼ばれた、女性のガイドが立つようになり、車窓の景色のお話をしてくれたそうです。また、観光列車も用意され、「紅葉やばけい号」や「新緑やばけい号」などが走っていました。

鉄道を使ったのは、もちろん観光客だけではありません。耶馬渓の山間の子供たちのお楽しみは、鉄道に乗っての浜遠足でした。また、学校への通学にも使われていました。

ただ、時代は変わっていきました。

やがて若者が都会に出ていくようになって、利用





者が減っていきます。マイカーが登場するようになると、さらに鉄道を使う機会は減っていきました。

鉄道会社も様々な対策を取りましたが、昭和50年（1975年）の9月30日に、ついに全面廃止となりました。62年間、地元の交通と流通を担ってきた鉄道は、最後の運行を大勢の人に見送られたといいます。

耶馬渓鉄道は役目を終えましたが、そのルートは今も残っています。そのほとんどはいまでもメイプル耶馬サイクリングロードになっていて、列車が通れる緩やかな傾斜の自転車専用道路で、安心して走ることができます。ところどころのトンネルも、大正のころに作られたものです。

三光のルートはおおよそ車道になっていて、道の脇に駅の看板が残っていますよ。また、土田の野路駅は当時のプラットホームが残されています。上の原の駅の跡には、駅前ロータリーの形が、道路の形として今でも残っていますよ。

8. 八面山平和公園

最後は戦争の話をしましょう。

この三光の土地は、直接戦場になったわけではありませんが、どこからでもわかりやすい、八面山があります。古くから、漁師が目印にしたり、和気清麻呂のようなお役人が、旅の中継地にしたりした、よくわかる山です。そしてそのわかりやすさは、飛行機から見ても同じだったようでした。

戦争はまだ100年もたっていない、わりと最近の出来事です。日付は昭和20年（1945年）の5月7日でした。太平洋戦争の末期で、日本各地が空襲に襲われていました。この三光の頭の上も、アメリカの飛行機が飛んでいたのです。



その日も、青空のずっと高いところを、アメリカの大きな飛行機、B29が、並んで飛んでいました。そこへ、日本の戦闘機が1機、まっすぐに飛んできたといいます。乗っていた人は、村田勉曹長（つとむそうちょう）という若い兵隊さんだったそうです。



村田さんの1機だけの戦闘機と、11機のB29とで、撃ち合いになりました。最終的に、村田さんの飛行機が左端のB29の翼に体当たりして、2機の飛行機はバラバラに砕けて落ちてきました。

落ちた飛行機は炎を上げて、山火事になりました。B29の方にはアメリカの兵隊さんが11人乗っていたそうですが、落ちた時に大勢亡くなって、なんとか生き残った人も、その後全員亡くなったそうです。村田さんも、けして立ち上がることはありませんでした。

その日の八面山は、爆発と山火事、見物人に軍人さん

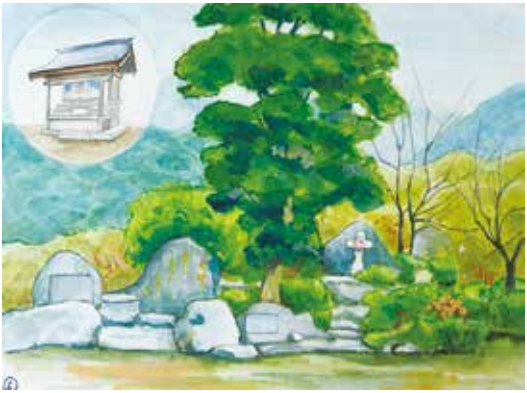
と、大変な大騒ぎだったといいます。

当時は三光村になる前で、八面山は山口村になります。村役場は、村田曹長のお墓を作り、アメリカ兵にも一応慰霊(いれい)の柱を立てました。

しかし、村の人にとって、顔も知らないアメリカの兵隊というのは、戦争に行った父親や息子の敵にみえたのです。アメリカ兵の慰霊柱(いれいちゅう)は誰かに鎌や斧で傷つけられたまま、誰にも守られることなく、朽ち果ててしまいました。

時代の流れが少し変わったのは、戦争が終わって5年がたった時でした。

本耶馬渓町の上津村の山本草堂さんが、慰霊(いれい)をしようと動き始めたのです。草堂さんは「祖国の為に尊い命をささげたものに、敵も味方もない。」と言って、周りの人から協力を集めました。そして、



B29が落ちた場所に、アメリカ兵をまつる小さなお堂を建てたのです。

さらに20年がたった昭和44年ごろ。草堂さんをきっかけに、地元の誰かから声が上がりました。「日本とアメリカ、両方の兵士を一緒にまつろう」、と。日本各地の人びとや、遠くアメリカの人も協力して、B29が落下した八面山の中腹に、平和公園ができあがりました。



昭和45年、戦いの日からちょうど25年目のことでした。ここは、国でわけずに兵士をともにまつる、めずらしい場所となったのです。

公園には今でも、兵士たちの故郷の石で作った平和の塔があります。アメリカの地図には、ここで亡くなった兵士たちの出身地が、故郷の石で彩られています。三光の地で亡くなった日本兵の慰霊碑も、その隣に並んでいるのです。

他にも、入り口には長崎の原爆を生きのびた柿の木の2世が育っています。広島の原爆の火を受け継ぐ「恒久平和の火」も、平和の塔の中に灯っています。子どもたちが手をつないで並ぶ銅像「世界少年平和像」には、違いを超えて手を取り合えるようにという願いが込められています。

どれも、平和が続くことを願って、たくさんの人が平和公園に集めたものです。

八面山は、遠くから見てもよくわかるお山です。八面山からも遠くまで見渡せます。山の上には、1000年以上前に神様とお坊さんが仲直りした場所もあります。平和公園でも生まれた国で区分せずにまつられています。

これからも平和な世界で、青い空が広がっていることを願います。



後書き

やぁやぁ、またお会いしました。

８つの物語は、お楽しみいただけましたでしょうか？　それとも、スキップのようにページを飛んでこられたでしょうか。挿絵も紙芝居から取り入れたものですから、どうぞご覧くださいな。

前書きでも申し上げましたが、この本にある物語だけが、三光のお話の全てじゃあございません。三光観光ボランティアガイドの会の紙芝居も、まだ取り上げてないお話がございますし、この書き手のまだ存じあげないお話もございましょう。

この文字を読んでいるお方。あなたですよ。もしここにはないお話をご存じでしたら、どうぞ隣のお人とお話してくださいな。

何々、どこのお家は春の花がきれい、ははぁ、なるほどそれは見事。

おやおや、あちらの旦那は竹で細工ができるとな。いやぁ、細かい。

なんと、あんなところにカフェがあるとな。一つ行ってみねばなりますま

い。なんていうのはどうでしょう

物語と申しますのは、人が暮らしているうちにいくつも湧き上がるものでございましょう。本で取り上げましたのは代々つながる先人の足跡ばかりでしたが、今日の小さな物語も、やがては語り継がれるお話になるやもしれません。

面白いことじゃありませんか。一つ記しておきましょう。いつか、これも記録になるやもしれません。

さぁ、こたびはこれにて終いとしましょう。

読者のあなた様にとって、少しでもこの地域を知る機会となりましたらば、幸いでございます。

末筆になりますが、今作の執筆にあたり、ご協力くださいました三光観光ボランティアガイドの会の会員の皆様に心より御礼申し上げます。

制作：三光観光ボランティアガイド
編集：三光地域おこし協力隊　松木　永
表紙：大谷　柚生香
印刷：高橋印刷所
発行日：令和8年（2026年）5月31日

